

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目： 若手研究(B)
 研究期間： 2008～2009
 課題番号： 20730491
 研究課題名（和文） 授業における児童の関係認識の発展に関する実証的研究
 研究課題名（英文） A study on development of children's understandings of relations in classroom activities

研究代表者
 杉本 憲子（SUGIMOTO NORIKO）
 茨城大学・教育学部・准教授
 研究者番号： 70344827

研究成果の概要（和文）：

本研究は、児童の関係認識がどのように成立し発展するかという観点から子どもの思考過程を把握するとともに、その認識を促す集団的な思考の場について考察したものである。本研究では、子どもの認識や論理の深化の過程に関する先行研究を参考にしつつ、小学校での研究授業を実施し、授業逐語記録やノート等の資料にもとづいて児童の関係認識の発展の過程を詳細に分析した。分析を通して、関係認識の発展過程を段階的に把握するとともに、認識の深化を支える集団的思考の場の役割と課題が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to clarify children's thinking process focusing on their understandings of relations and their development. For this purpose, first, I examined theoretical studies on children's thinking process and their development. Second, I observed and recorded classroom activities in elementary schools. Based on those records of classroom discourse and children's notebooks, I analyzed the process of children's understandings of relations and clarified the role of classroom learning which children discuss and think interactively.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：教育方法学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育学、授業研究、思考過程、関係認識

1. 研究開始当初の背景

近年、国際的な学力調査等の結果も踏ま

えて、日本の子どもたちの学力の状況について議論がなされてきた。全体的な学力の

水準もさることながら、学力の質が問われていると言える。新しい教育課程においても「思考力・判断力・表現力等」の育成が課題とされているが、問題の状況を把握し、それに関わる諸事実を関連づけて論理的・多角的に思考する力の育成が求められている。

また一方において、学習に対する意欲の低下や学ぶことの意味が感じられないといった子どもたちの状況も懸念されている。こうした問題は、授業という場が根本において学習対象や他者と自分との関係を見出し、自己をとらえ直していく場になることの必要性を表していると考えられる。

このようなことから、子どもたちが学習対象に関わる諸関係、あるいは自己と学習対象や他者との関係を認識し、それを深化させていくという過程を十分に実現していくことが、今日の授業の重要な課題であると考えられる。そこで児童の関係認識に着目して、授業における思考の発展過程を明らかにしていきたいと考え、本研究の構想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、授業において児童の関係認識がどのように成立し、発展していくかという観点から児童の思考過程を把握するとともに、その認識の発展を促す授業のあり方を明らかにすることを目的としている。

本研究では関係認識を広くとらえるものとし、学習対象に関する諸関係の認識のみでなく、自分と対象ないしは自分の考えと他者の考え等の関係の認識といった点も含めてとらえるものとする。

具体的には下記の点が課題である。

- (1) 思考における関係認識の持つ意味やその発展段階についての理論的検討
- (2) 授業の分析にもとづく児童の関係認識の発展についての考察
 - ① 児童の関係認識の発展過程に関する段階的把握
 - ② 関係認識の深化を促す授業のあり方についての考察

3. 研究の方法

(1) 関係認識という視点から児童の思考過程を研究するにあたり、認識の深化において関係の理解がどのような意味を持つか、またその発展段階等について、先行研究にもとづいて理論的に検討した。

(2) 授業の分析をもとに、児童の関係認識の発展過程を考察するとともに、それを促す授業の構築に関する知見を得るため、小学校での研究授業を実施し、その観察および記録をおこなった。

子どもの認識の深化の過程とその際の集団的な思考の役割を探るにあたって、主として子ども同士の話し合い等を含み込んだ授業を対象とした。観察・記録を実施した授業と時間数等は、下記の通りである。

- ・平成20年度：小学校2年生算数「九九のきまり」(2時間)
- ・平成20年度：小学校6年生国語「海の命」(10時間)
- ・平成21年度：小学校1年生国語「花いっぱいになあれ」(4時間)

実施した授業についてはビデオカメラやレコーダー等で記録し、それをもとに逐語記録を作成するとともに、授業で記述された子どものノートや作文等も分析資料として収集し、整理した。

これらの資料にもとづいて、

- ① 児童の関係認識が授業においてどのようにあらわれ、また発展していくか
 - ② 関係認識の深化を促す授業のあり方（とくに集団的な思考の意義と課題）
- という観点を中心に、授業記録やノート・作文等をもとに具体的な授業の分析をおこなった。

なお、上記の研究授業を中心としつつ、これまでに筆者が記録してきた他の研究授業等のなかで本研究の遂行に有効な実践記録等については合わせて分析の対象とした。

4. 研究成果

(1) 思考の深化における関係認識の持つ意味について、先行研究にもとづいて理論的検討をおこなった。とくに個の認識の深化を関係の動変容としてとらえている上田薫の理論に着目し、その知識論について著作を手がかりに考察した。

上田の知識論の特質は、知識を互いに他の知識と関係し合うもの、また動的に変容するものととらえる点にある。上田が述べている「知識の相対性」にはその点が明確に示されている。知識をこのようにとらえるとき、知識の獲得とは単なる「蓄積」ではなく「矛盾」を媒介としたひっくり返しの連続、すなわちこれまでの関係づけがとらえ直され、再構築されることを意味する。

また上田が認識の変化発展の重要な契機として「矛盾」を位置づけていることは、児童の関係認識がどのように発展するかを究明するという本研究課題にあたって注目される点である。以上の研究成果については、論文としてまとめた。

また関係認識の発展過程を授業の分析を通して具体的に把握するにあたり、日比裕が提示している子どもの論理の形成過程を検討した。日比は発達をとらえる基本的な視

点として子どもの論理に着目し、その発展過程を、第1に関心対象の明確化（子どもが対象に関心をもつという過程）、第2に対象の持つ諸関係の把握（対象のもつ種々な諸関係が子どもに把握されていくという過程）、第3に対象の追究と対応した子どもの内面の把握（子どもたちが自己の関心対象を追究しながら、それと密接に関連して自分自身の内面のあり方をとらえていくという過程）とに区分して段階的に示している。日比の示している子どもの論理の形成過程との関連において、本研究で焦点化する点を明確化した。

(2) 授業の分析による児童の関係認識の発展に関する研究成果については、先に示した二つの観点に即して以下に述べる。なお、以下の研究成果については論文としてまとめた。

①関係認識の発展過程に関する段階的把握

児童が対象のもつ関係をどのように理解し、またその理解がいかに発展していくかという観点から、小学校算数「四角形で立体を作ろう」の事例にもとづく詳細な考察をおこなった。

本授業は、四角形に切り取った画用紙（正三角形2つからなるひし形）を用いて立体を作り、立体ができるはり合わせ方を考えたものである。初めに2枚を使って、続いて3枚、4枚を使って立体を作り（できる立体はそれぞれ正四面体、六面体、正八面体となる）、児童が見つけたはり合わせ方をもとに立体ができるはり合わせ方の特徴を考えた。

授業の過程で、児童は四角形をはり合わせた形やそれを使ってできる立体に名前をつけて呼んでいる（「ねこ」、「きつね」、「ダイヤモンド」等）。こうした児童のつけた名前とその果たす役割に着目しながら、児童の認識の発展の過程を考察した。児童がつけた名前は、最初、対象を個別的に表現するための言葉として登場する。しかし授業の過程で、その言葉を用いながらはり合わせた形相互、あるいははり合わせ方と立体とを関連づけ、その関連づけの認識を深めていくことが考察された。具体的には、下記のような過程が見いだされた。

第1には児童が多様なはり合わせ方を見つけ、それに名前をつけていた。名前はそれぞれ個別的に与えられており、はり合わせ方相互の関係性は認識されていない。第2には、はり合わせ方の中に含まれている共通の形が着目され、その形を視点として複数のはり合わせ方を相互に関係づけてとらえていく。第3には、はり合わせ方の中に含まれている形と、立体ができる／でき

ないとの関係が着目される。つまり平面と立体との関係について着目されるが、平面と立体とを連続的にとらえていく視点までは言及されておらず、それゆえにその関係の把握はまだ不明瞭である。第4には、平面がどのように立体として変容するかという、平面と立体との関係を連続的にとらえようとする視点が出される。そのことによって、はり合わせ方の中に含まれている形と、立体ができる／できないとの関係性がより理解される。本事例に見られる段階を、先に(1)で述べた日比の子どもの論理の形成過程と対応させて検討した。

また認識の発展に介在する要因に関する点として、児童が試行錯誤を重ねる中で、その経験にもとづく気づきが得られ、見通しをもった活動へと質的に変容していく過程が考察された。つまり試行錯誤的な活動から見通しをもった活動への発展、言い換えれば関係認識の成立や発展には、その間にやや不明瞭ながらも着目された関係の気づきや予測というものが介在していることが考察された。

②関係認識の深化を促す授業のあり方についての考察

児童が学習対象に関する理解をどのように発展させ、またその際に集団的な思考の場がどのような役割を果たしうるかを具体的な授業を分析することを通して、関係認識の深化を支える授業の基盤について考察した。

具体的には、小学校国語「海の命」の授業を考察の対象として取り上げ、単元を通しての児童の認識の変容を考察した。クエを殺さなかったから主人公：太一は「やさしい人」だという学習当初の児童の認識（つまり太一の行為とそのやさしさを直線的に関係づける認識）は、単元の展開過程で、「やさしいから殺さなかったのではないのではないか」という新たな考えが出され、児童相互の考えの関係ないし対立点が立ちあられることによって、改めて検討されることとなった。これを受けて児童が再度考えることによって、主人公の思いや生き方、登場するクエの意味等についての考えが再構成されたことがうかがえた。

本分析を通して、児童相互の考えの関係（対立点や共通点）があらわれ、吟味される集団的な思考の場が、関係認識の発展において重要な役割を果たすことが考察された。したがって子どもが相互に考えを関連させながら理解を深めていくためには、その基盤として、まずは各自の考えを表現できることが求められるであろうし、その上で児童が自己と他の考えを関連づけてとらえる学習の体制づくりが求められる。日比

は、児童の発言を量から質へと深めていくという課題を基本的なテーマとして、児童発言にみる授業の五段階論を示しているが、そこにも「自他の関係（疑問点・対立点・共通点等）の認識」が位置づけられている。児童が自身の考えを他と関連づけてとらえていく基本的な姿勢をつくることの重要性は、本研究において授業の観察・記録・考察等をおこなう中で、筆者が強く感じた点であり、集団的な思考の過程において子どもの関係認識を深めていく基盤として要請されると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 杉本憲子「授業における子どもの理解の変容と集団的思考の過程に関する一考察」、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第59号（印刷中）、査読無。
- ② 杉本憲子「上田薫の知識論に関する一考察」、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第58号、321-331頁、2009年、査読無。
- ③ 杉本憲子「授業における子どもの関係認識の発展に関する研究 -子どもが共有する言葉に着目して-」、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第58号、333-344頁、2009年、査読無。
- ④ 杉本憲子「新しい教育課程における授業像を考える -『活用』と『言語活動の充実』に着目して-」、『考える子ども』No. 322、18-22頁、2009年、査読無。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉本 憲子 (SUGIMOTO NORIKO)
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：70344827

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無